

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）  
（分担）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究  
課題番号：H30-エイズ-一般-003

【分担研究1】拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製

研究分担者：高田 清式（愛媛大学医学部附属病院 教授）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、機能評価と体制整備に関する本研究によって HIV 診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。令和元年度の研究成果として、本研究では拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製を行った。地方での HIV 診療のモデルとして体制整備・充実に努めつつありさらに四国全体に広げていくことを計画し実行しつつある。

**研究分担者**

武内 世生・高知大学医学部・准教授  
末盛浩一郎・愛媛大学医学系研究科・特任講師  
井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長  
中村美保・高知大学医学部附属病院・看護師

**A. 研究目的**

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指定され、累計 180 名以上の患者を治療している。四国地区は近年 HIV・エイズ患者の増加が著しく、当県もエイズ拠点病院に指定されている病院が 17 施設もあるものの殆どが診療未経験であり、大半の患者が当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が 29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者の HIV・エイズ患者が多く、HIV 感染および合併症が進行し日常生活に差し

障りが著しく自宅以外での長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で生活困難な長期療養患者の対応については、他の施設への紹介・受け入れを個々の事例において行っているが HIV に対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情である。さらに治療以外にも家族対応および就業面など社会的な対応も迫られることも多い。これらの実情のもと、数多くの医療スタッフによるチーム医療が必要な領域であることを踏まえ、当院では数年前より HIV 診療チームを立ち上げ活動しつつある。こうして愛媛県各地域の各病院・施設と連携を行うように努めているものの、対応すべき HIV 感染症患者は多くかつ経済・人材面も満たされておらず、連携しうる病院・施設への啓蒙や人材の育成も患者数の増加からは極めて不十分な状況である。このような背景のもと、中核拠点病院の立場から、県内の病院・施設との連携整備、さらには

県・市の保健行政との連携も踏まえ、HIV感染者・エイズ患者に対する診療体制を整備し充実を図りたいと考えている。また、高齢化と患者数の増加にて同様の背景である高知県の拠点病院も研究対象として活動していく計画である。さらには、今年度には徳島県、香川県にも研究への参加を促し、ブロック拠点病院が存在しない四国地区全体のHIV/エイズ診療体制の充実に努めることを実行していきたい。

さらにこれらの研究成果は、エイズ学会をはじめ多くの機会に公表・報告していくことで、他府県などにモデル地区としての立場で発信し、四国のみならず全国の地域のHIV診療の充実に努めたい。

## B. 研究方法

拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製

愛媛県および高知県の各拠点病院のHIVに関する啓蒙、意見交換を図るために、県単位での講演会・勉強会および県の行政の協力を得てHIV診療ネットワーク会議（各県全域の拠点病院が参加）や各病院にて講演会を開催し、かつ情報収集のため意見交換を行う。また、研修教材の作成に着手する。さらに、徳島県、香川県とも連携し、四国全体のHIV診療体制の充実を図る。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

## C. 研究結果

愛媛県の各拠点病院のHIVに関する啓蒙、意見交換を図るために、県の行政の協力を得てHIV診療ネットワーク会議（各県全域の拠点病院が参加し討論）を令和2年

2月18日に開催した（四国の連携のため高知県の医療スタッフも参加した）。研修教材の作製に着手した。また、今年度は四国の各県の拠点病院の看護師・ソーシャルワーカーを中心に、看護・介護に関する合同会議を行った。また、愛媛県の南予地域の重要な拠点病院の1つである、大洲市立病院にて「最新の知っておきたい感染症」と題して、HIV感染症に関する最新の情報を織り込み令和2年3月11日に講演会を行う予定であった（コロナウイルス感染のため5月に延期、図1に抜粋を示す）。

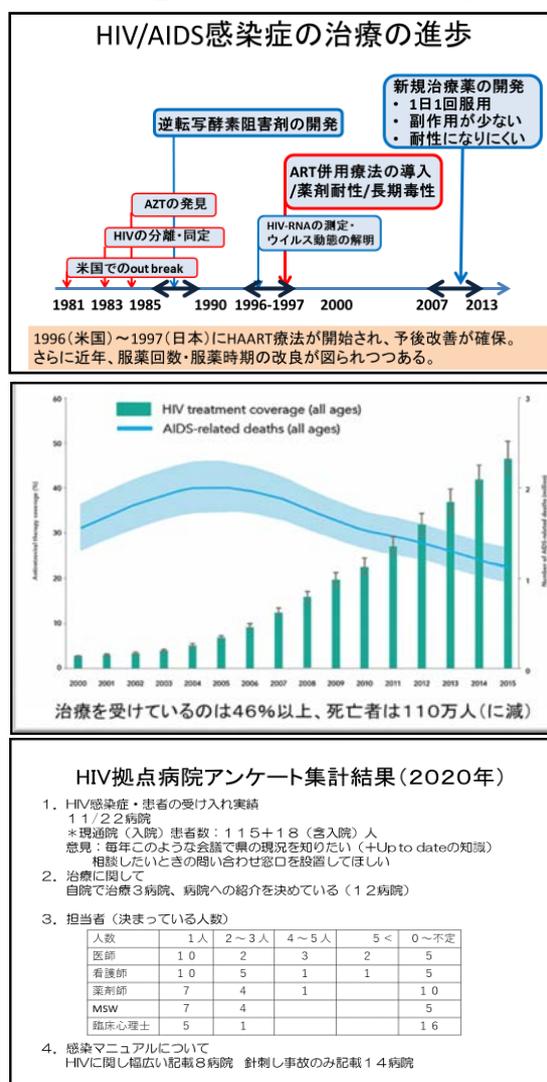
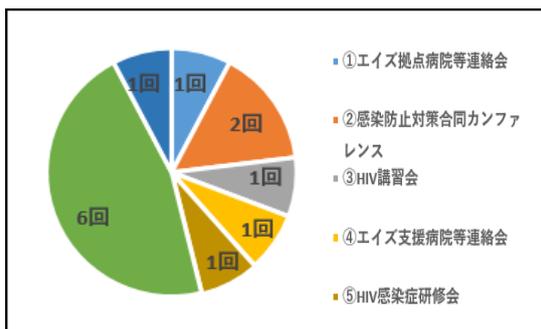


図1 講演会の資料スライド(抜粋)

さらに高知県においては、①高知県エイズ拠点病院等勉強会、②感染防止対策合同カンファレンス、③HIV講習会、④エイズ支援病院等連絡会、⑤高知県 HIV 感染症研修会、⑥出前研修（6施設）、を開催した（図2）。



<表1：事例紹介>

70歳代 男性 既婚（妻：施設入所、長男：A市在住） ケーパソン：長男  
 20XX年（60歳代）  
 HIV感染症と診断され、抗HIV薬内服開始。  
 服薬自己管理、外来通院もできていた。  
 HIVウイルスコントロールもできていた。  
 20XX年+10年（70歳代）  
 脳梗塞発症し入院、右半身麻痺、失語症、えん下困難あり。  
 リハビリ施行し、車椅子での体位保持は可能。  
 胃瘻造設後、栄養、内服薬を注入している。  
 今後について：長男からは、「自分の家庭があるため、家では看れない」  
 妻は施設入所しており、在宅療養は困難。  
 主治医より担当MSWに転院調整を依頼。

図2 高知県での研修会（令和元年度）

研修会は事例（図2抜粋）を提示し、各参加者に問題点と解決策などを討議する形式をとり、様々な討議がなされた。さらに高知県での歯科診療連携施設を25から47施設に増加させ、HIV感染者が円滑に歯科診療を受けられる体制を充実させた。

四国全体の四国地区エイズ診療中核拠点病院HIV担当看護師会を令和元年10月19日に開催し、4県9名の看護師が参加し、各施設からの報告、課題について協議した（行政との連携、HIV専任看護師の必要性、地域医療機関との連携、各地区の研修会の現況など）。

また、今年度は看護師だけでなく医師も含めて徳島県、香川県の様々の医療スタッフも参加し、四国全体でスタッフ合同会議を行った（令和元年11月28日）。また、次年度に向けて四国の各県の拠点病院の看護師・ソーシャルワーカーを中心に、看護・介護に関する合同会議を行うために、綿密な打ち合わせを行った。

#### D. 考察

地方における病院・介護施設間のHIV診療連携として愛媛県と高知県をモデルに、地方におけるHIV診療および介護連携に関する啓蒙とともに実態調査を行った。全国的に少子高齢化社会になりつつあり、高齢化が一步進んでいる愛媛県および四国は、今後のHIV感染者の高齢化と介護・福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

四国地区にはブロック拠点病院はないものの、当院では令和元年末現在累計180名以上のHIV診療経験があり（県内の大半のHIV診療を担当）、愛媛県での中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年10名以上の新規感染者・患者が報告されており、また年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢のHIV感染者が多く見られHIV診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢のHIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において令和元年末現在50歳以上の8割は発見時にエイズ患者である

という現実がある。なお、高齢化の進んだ地方においては、薬剤の改良・開発が年々進んでいるものの、今後 HIV 感染者の高齢化とともに薬剤の副作用を考慮した内服継続・薬剤の減量なども重要な観点として検討していく必要があると思われ、今後の 1 課題として、まず四国地区に応じた実践的な（事前評価委員からのコメント・助言も参考にし、針刺し事故時の対応方法および配備薬剤も具体的にどの病院に備わっているかなど、どの地区においても素早く対応ができるような内容も含めて）抗 HIV 薬および併用薬に関する資料を作製した。

いずれにしても HIV 患者の早期発見を目的として、留意点の強調および患者の増加を抑制するための HIV 感染に対する予防啓発とともに、現実の感染者に対して地方の各地域・病院において HIV 診療の向上と福祉の連携体制の充実を図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握するための調査研究に努めたいと考える。

さらに高知県での研修会のアンケート結果からも、受け入れできない理由として

「知識不足」と「不安」があることが明らかとなった。まず、知識不足に対しては、HIV 陽性者を受け入れる前に全職員に対する研修会（出前研修）を開催する事が有用で、研修内容としては、基礎知識、治療法、感染対策、曝露後の予防投与等が必要と考える。一方、不安の解消には、実際に HIV 陽性者と関わってもらう 1 日実地研修が有効であると考えられる。現場を実際に体験して正しい知識を得ることで、不安や先入観を払拭し、偏見という垣根がとれると期待できると考える。なお、研修会終了

後のアンケートで半数は「受け入れできない」と回答しているものの、受け入れに対する課題は、「受け入れできない」と回答した理由と同じであった。この結果からも、受け入れ不可と回答した施設だけでなく、受け入れ可能と回答した施設に対する教育・研修が必要と考えられる。

また、愛媛県ならびに高知県に加え今年度は徳島県、香川県とも福祉連携体制などについて十分に討議・連携ができたことは四国地方全体を考える上でも有意義であった。高齢化にあたり、HIV 診療および福祉連携のあり方について具体的な今年度の出張研修の結果等を踏まえ、さらに充実に努め、高齢化率の高い愛媛県のような四国地方においても、早期発見や重症患者の治療が十分に行われるように常々心がけて、充足した生活が 1 人では送れない HIV 感染患者に対し、拠点病院および介護福祉間の連携が円滑にできるように努めていく必要性があると考え。さらになお、その介護福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

## E. 結論

ブロック拠点病院がない地域において、HIV 診療体制整備のために愛媛県及び高知県で拠点病院などへの講演会を行い、具体的な問題を整理し知識・経験を共有できた。高齢化社会を迎え介護・療養が必要な HIV 感染・エイズの増加に対応するために、HIV 診療体制の整備は、地方においては特に各病院・施設間の連携の充実が不可欠であり研究を継続し地方のモデルという立場からもさらに向上に努めたい。

## F. 健康危険情報

該当なし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

1. 今日の治療指針 2019 年版、256-257、2019、高田清式：消化管寄生条虫症。
2. 日本エイズ学会誌、21(2):256 -257、2019、中村美保、前田英武、西田拓洋、四國友理、小松直樹、武内世生：HIV 陽性者の医療機関受診についての実態調査。
3. J Infect Chemo : doi.org/10.1016/j.jiac.2019.09.008、Nakao A, Yamanouchi J, Takenaka K, Takada K : The Iowa Gambling Task on HIV-infected subjects.
4. IDCases. : 2019 Jul 27;18 : e00609、Yanagisawa N, Takeuchi S, Nakamura M, Yoshida Y, Teruya K, Takada K : Large abscess formed in the abdominal wall by Mycobacterium avium complex : A case of unmasking immune reconstitution inflammatory syndrome.

### 2. 学会発表

1. 高田清式、末盛浩一郎、山之内純、西川典子、辻井智明、井門敬子、木村博史、乗松真大、武田玲子、若松綾、小野恵子、中尾綾、HIV 関連神経認知障害 (HAND) における髄液中のネオプテリン量および HIV-RNA 量と様々の ART 療法後の変化、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月
2. 若松綾、武田玲子、芝田佳香、宮崎雅美、藤原光子、小野恵子、中尾綾、乗松真大、木村博史、末盛浩一郎、井門敬子、山岡多恵、高田清式、愛媛県における実地研修の現状、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

3. 中尾綾、山之内純、末盛浩一郎、竹中克斗、高田清式、HIV 陽性者に対するアイオワ・ギャンブ リング課題と BADS との関連、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

4. 蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、岡眞一、瀧永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌秀、太田康男、茂呂寛、渡邊珠代、松田昌和、重見麗、岡寄玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊大、中村麻子、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、南留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦互、吉村和久、菊地正、国内新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性 HIV-1 の動向、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

5. 西田拓洋、中尾綾、中村美保、川田通子、海面敬、臼井麻子、池谷千恵、吉川由香、武内世生、窪田良次、尾崎修治、佐藤穰、千酌浩樹、和田秀穂、山下光、山之内純、高田清式、中国四国地方における HIV 関連神経認知 障害に関する研究—体制構築—、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

6. 芝田佳香、宮崎雅美、渡辺美沙、武田玲子、若松綾、小野恵子、木原久文、末盛浩一郎、井門敬子、中尾綾、竹中克斗、高田清式、山岡多恵、非英語圏のエイズ患者に対する看護を行った一例、第 33 回日本エイズ学会・学術総会、熊本、2019 年 11 月

## H. 知的財産権の登録状況 (予定を含む)

該当なし